

石井クンツ昌子先生のご退職に寄せて

石井クンツ昌子先生は、1978年にワシントン州立大学社会学部をご卒業後、The Japan Timesに1980年までお勤めになりました。1982年に再び、学問の世界に戻られ、ワシントン州立大学大学院修士課程、博士課程を修了され、1987年に同大学から博士号（Doctor of Philosophy; Ph.D.）を取得されました。1987年から2006年までカリフォルニア大学リバーサイド校社会学部で准教授として勤務され、2006年にお茶の水女子大学生活科学部へ教授として着任されました。その後、2020年3月に退職されるまでの14年間、本学の学部・大学院教育と家族社会学やジェンダー研究に多大なる功績を残してくださいました。また、大学の運営についても多くを手掛けられ、現在の本学の発展の礎を作ってくださいました。

石井先生が本学に着任された2006年当時は、大学が法人化（2004年）した直後であり、女性研究者のための支援プログラムや国際的な研究・教育プログラムなどの数多くのプロジェクトが動き出した時期であります。本学がこれまでに経験したことのない数多くの変化に直面している真っ只中に、先生は国際学会で牧野カツコ先生（本学名誉教授）と運命的な出会いをされたことをきっかけとして、カリフォルニアから日本へいらっしゃったわけです。先生が本学の発展のために、いかに多くのご貢献をされたのか、先生のご活躍の一部となりますが、ここに記すことで皆様と共有しながら、感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。

石井先生の本学へのご貢献の中で、私が真っ先に思い浮かべるのは、教育に対するパッションです。2006年から2020年までの14年間で39人の博士号取得者、44人の修士号取得者、113人の学部ゼミ生を育て上げられました。14年という年月は、大学教員にとってはそれほど長い時間ではありません。学部生は4年間を一つのスパンと考えると、14年は3回半でありますし、博士後期課程の院生は、平均5年かかり博士論文を完成させますので、14年間に39人の博士号取得者を輩出されたということは、驚異的な偉業であったと思います。私は博士論文の副査として、先生の論文指導を時々拝見させていただきました。先生は後述の「ポジティブ家族社会学」を提唱されておりますが、そのご指導も常に「ポジティブ」な姿勢を貫かれておりました。つまり、学生たちの研究成果の良い面に着目され、引き出して、それを温かく、熱心に育てていくという方法を日常的に実践されておりました。その結果、先生の周りにはいつも学生たちが集まり、勉学に励み、多くの優秀な卒業生たちが、様々な分野で大活躍されています。新型コロナウイルス感染症拡大防止のために3月に予定されていた最終講義を先日（2020年11月22日）、オンラインで開催いたしましたが、参加登録者は300名を超えました。予想を上回る参加者数は、先生のご教育が今も多くの卒業生たちのかげがえのない思い出として胸に刻まれている証であると思います。

ご研究に関しては、本誌の業績目録をご覧になれば明らかな通りです。単著・共編著・監修書は5冊、編著書等掲載論文は36本、学術誌掲載論文は60本、学術誌特集号編集が2冊、調査報告書が16冊と膨大な研究業績を残されました。先生が専門とされる家族社会学は「ポジティブ家族社会学」となり、石井先生によるオリジナルな学問として開花したということは特筆すべきことでしょう。「ポジティブ家族社会学」は様々な問題のポジティブな面に着目し、その建設的な解決策を探っていくというものです。日本では男性の育児・家事の参加が少ないことが問題となりますが、先生のポジティブ家族社会学では、男性の育児を促すためにはどのような環境が必要かというアプローチとなり、ここに「育メン」研究が誕生しました。日本では2010年ごろから「イクメン」がブームと

なりましたが、石井先生のご研究成果がブームの後押しをしたと考えられます。家族社会学のご研究以外にも、『社会科学系のための英語研究論文の書き方～執筆から発表・投稿までの基礎知識』という本を出版され、日本人研究者の国際的な業績づくりをサポートしてくださいました。

校内では、2007年の研究・教育委員会委員を皮切りに、生活社会科学講座主任、研究推進・社会連携室室員、教育研究評議員（国際交流担当）、国際本部長、国際企画運営委員会委員長、外国語教育センター員、グローバル協力センター長、グローバル人材育成推進センター副センター長等を歴任されました。先生が国際交流に関わる業務を担当されていた時期は、本学が国際的に飛躍を遂げようとしていた頃にあたり、先生は多くの仕事に力を発揮されていました。月に何度も海外出張をなさり、大変にお忙しくされていたのを覚えています。2015年からご定年直前までは、ジェンダー研究所所長となられ、海外からの著名な研究者の招聘、国際シンポジウムの開催等を通じて多くの貢献をされました。先生はどのようなお仕事であっても、前向きにエネルギーに取り組みられ、いつのまにか多くの人を巻き込んで、あっという間に成し遂げてしまうのです。頼もしい女性リーダーの姿を先生自らが体現されていました。

さらに学外においても、日本家族社会学会会長、日本社会学会理事、日本家政学会家族関係学部会役員、社会学コンソーシアム編集委員・評議員などの重責を務められました。学術的なご活躍だけでなく、お茶の水女子大学と協定を結んでいる福井県男女共同参画審議会会長、同県のNPO法人おっとふあーざー理事、第一生命財団の編集委員など、地方自治体や民間の団体組織・NPOに至るまで、多種多様な場で男女平等へ向けての取り組みに積極的に取り組まれました。

このように石井先生のご活躍は本学だけに止まらず、学会や地域社会に至るまで広範囲に及びました。これらのことを日本にお戻りになったわずか14年間で、軽やかに成し遂げられたのです。

最後に、先生のお人柄を象徴する10月恒例の「ハロウィンパーティ」のことを少しだけご紹介したいと思います。私が着任して1か月が過ぎたころ、この「ハロウィンパーティ」にお招きいただきました。その時の石井先生の衣装はピンクレディの「UFO」のシルバーのミニワンピースでした。まだ、本学に慣れていない私の研究室までその衣装で迎えに来て下さり、本館の廊下を小走りで歩かれた先生を忘れることができません。毎年、「ハロウィンパーティ」にはご招待いただきましたが、先生は毎年、衣装を変えて、ゼミ生の皆さんもそれぞれに変身され、楽しいゼミが繰り広げられておりました。院生指導、学部生指導の場では、時に厳しいコメントをされましたが、楽しい時間は思い切り楽しみ、交流するということを通じて、石井流教育が行われていたのだと思います。

先生との思い出は尽きませんが、14年間、本当にありがとうございました。今後も生活社会科学講座や大学院ジェンダー社会学専攻、ジェンダー学際研究専攻の行末を見守っていただくと同時に、「大塚の母」としてご助言をいただくことをお願いしつつ、先生のさらなるご活躍とご健康をお祈りして、ご退職に寄せてのささやかなご挨拶とさせていただきます。

石井クンツ昌子先生最終講義準備委員会委員長
斎藤悦子